

平成 29 年度 しが生物多様性大賞審査会 講評

滋賀県と滋賀経済同友会の共催により平成 25 年度に創設されました「しが生物多様性大賞」。本年は「企業部門」「一般部門」「協働部門」の 3 部門に分けて募集が行われ、県内各地から 8 件の応募をいただきました。

審査の結果、今年度の「しが生物多様性大賞」においては、3 つの活動に対し、知事から賞が贈られることになりました。

1 件目は、企業部門で応募された、株式会社コクヨ工業滋賀の「ヨシでびわ湖を守るリエデンプロジェクト」。

2 件目は、協働部門に応募された、生物多様性湖東地域ネットワーク「トンボ 79 大作戦～湖東地域のトンボを救え！」の皆様。

3 件目は、同じく協働部門に応募された、特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会の「オオバナミズキンバイ除去活動」です。

それぞれに講評を述べさせていただきます。

まず、株式会社コクヨ工業滋賀様の「ヨシでびわ湖を守るリエデンプロジェクト」です。コクヨ工業滋賀の有志の皆さんによる初めてのヨシ刈りから、昨年で 10 年を迎えられたとお聞きしました。数名から始まった活動は、今では産官学民数百名が集い、延べでは 3,000 人以上が参加する大きなネットワークへと発展されました。

滋賀県のヨシ条例では、「守る」「育てる」「活用する」の 3 本柱を標榜しています。

活動ではこの点も重視されており、ヨシからできたエコ文具「リエデンシリーズ」を商品として展開。ボランティアで刈ったヨシも原材料の一部として用いられています。

「リエデン」というブランド名から連想される「めぐみ豊かな楽園・琵琶湖」とともに生きる未来にむけて、これからもぜひ歩みを進めていただきたいと思います。

続いて、生物多様性湖東地域ネットワークの皆さんが展開されている「トンボ 79 大作戦 湖東地域のトンボを救え！」です。

トンボは種やライフステージごとに利用する環境が異なり、トンボの生息環境を維持することが水辺環境の保全に通じるとして、全国各地でトンボを指標とした市民参加型の調査が行われています。

まだ開始から間もない活動ですが、その地にあり続ける「企業」という存在が、今後トンボを「さがし」「まもり」「伝える」取組の中心を担い、湖東の市民のみなさんに「トンボを見るまなざしと、その意味を読み解く力」を広げていただきたいと思いますとの期待をこめて、大賞とさせていただきます。

最後の賞は、特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会、IVUSA の皆さんが、行政や漁師、環境団体、企業の皆さんなどと協働で取り組まれている「オオバナミズキンバイ」の除去活動です。

IVUSA では 2013 年に 14 名の学生が、特定外来生物・大オオバナミズキンバイの除去活動を開始しました。

夏の最中に水に入り、水草を引き上げ、除去するのは、大変な重労働ですが、「学生の力で琵琶湖を守りたい」という強い思いで活動を続けられ、昨年の夏には 3 日間延べ 1,500 名以上の参加により 553 地点での除去が行われたとお聞きしました。

外来種の対策においてもっとも重要なことは早期発見、早期除去ですが、より大切なことは外来種問題を起こさないこと。そのために、ひとりひとりが外来種と向き合って引き起こす問題を知り、考える機会を持つことが必要だと思います。

IVUSA の皆さんの取組は、その貴重な機会でもあります。

今後も変わらず次の学生に信念が引き継がれ、また資金面を含め、活動を共に発展させる協働の体制がより強化されることを願って、大賞に選出させていただきました。

また、以上 3 つの知事表彰に加え、今年は 2 つの特別賞が選出されました。

1 つ目は、フラワープロデューサー・一花さんによる「BIWAKO SWEET PROJECT ～花を贈ろう！マザーレイクに感謝をこめて」です。

一花さんは、マザーレイクフォーラムへの参加をきっかけに生物多様性の問題を知り、お花の販売代金の一部を、マザーレイクフォーラムに寄付されています。

また、水草堆肥を使った栽培キットの販売や、堆肥の無料配布も行われています。

タグのデザインの秀逸さ、そして「生物多様性」という言葉とはちょっと結びつきづらいほど華やかなオーラに、審査員一同、心を奪われました。

「環境とは一件関係のなさそうな事業でも、実際は誰もがつながっているし、また、誰でも貢献できる」という言葉は、よく聞かれるけれど、実際の実現は難しいものです。

一花さんの取組は、そこをさらりと飛び越えて、現実には歩みだされています。

「いきものをまもる」とがんじがらめになるだけでなく、人の暮らしのあたたかなシーンに、琵琶湖への思いがさらりと位置づいている。そんな一花さんのお花を、私もぜひ買い求めたいと思います。

2 つ目の特別賞は、特定非営利活動法人比良の里人とびわ湖自然環境ネットワークが展開されている「比良の水辺再生プロジェクト」です。比良は、県内でも有数の伝統的な里山の景観が色濃く残る地です。

活動では、地域の資源を活用し「小規模でも継続して取り組むことが重要」と、すでに 12 年間の活動を続けられています。

プレゼンの際に見せていただいた比良の風景の美しさに審査員一同心を奪われるとともに、

身の丈で手を加え、その効果や反応を受け止め、活動を続けられる皆さんの姿に、引継ぎ、引き継いでいくことの大切さ、「自身で手をいれられること以上の持続可能性はない」との思いを深くしました。

しが生物多様性大賞は、今回でいったん節目となるとお聞きしています。そのなかで私たち自身が改めて、審査会を通じて、本表彰制度が設けられた際にキーワードとして掲げた「滋賀らしさ」とはなんだったのかを教えてもらった気がします。今後もぜひ、こうした地域の取組がより発展していくような仕組みづくりを県の方に心から要望し、講評とさせていただきます。